

●博士学位請求論文要旨

終結を目的としないソーシャルワークの研究 —コミュニティソーシャルワーカーへのインタビュー調査を中心に—

福祉社会デザイン研究科社会福祉学専攻博士後期課程

上西 一貴

1. 研究背景および問題意識

本研究は、ソーシャルワークの標準的展開過程（プロセス）の1つとされている「終結」を研究するものである。終結は重要な局面とされながらも、研究的な関心はあまり向けられてこなかったことが指摘されている。先行研究としては、終結したケースに関する量的・質的調査があり、終結の要件や終結に対するクライアントの反応、それらへのソーシャルワーカーの対応などが明らかになっている。

従来、ソーシャルワークにおける援助の終結は単に援助を終わらせることではなく、「関係を解消すること」として説明されてきた。しかし現在の日本の社会福祉、とりわけコミュニティソーシャルワーク（以下、CSW）においては、人びとの地域生活の維持や社会的孤立への対応のための援助が求められ、関係形成や関係維持が重視されている。そうした援助において終結は不明瞭なものになっている。

不明瞭な終結は社会的背景の結果として生じている。この不明瞭な終結に着目して、いま改めて「終結とは何か？」という根本的な問いを探求する必要がある。

2. 研究目的

本研究は、コミュニティソーシャルワーカー（CSWer）の援助に関するデータを用いて不明瞭な終結の構造を考察することを目的とした。

3. 研究方法

不明瞭な終結を研究する場合、従来の終結研究のアプローチのように終結を自明の概念として研究を進めていくことができない。そこで本研究では稲沢公一（2017）の援助の3要素理論を分析枠組みとして用いることにし、終結を「援助の3要素（援助対象、援助過程、援助関係）がそろった後に、どれか1つ以上の要素が欠けることである」と規定することから始めた。その規定にもとづき、援助対象（当事者の否定的な状態や状況）、援助過程（援助対象の軽減または解消のための過程）、援助関係の各要素についてのデータを分析し、それらのデータから間接的に不明瞭な終結の構造を考察するという終結研究アプローチを考案した。本研究は終結の行為を分析するものではなく、その背景構造である終結そのものを分析する終結研究である。

分析にはX社会福祉協議会のCSWerが蓄積してきた活動記録と、全国の都道府県・区市町村社会福祉協議会職員を対象とした質問紙調査データ、そしてX社会福祉協議会のCSWerへのインタビュー調査データを用いた。このように3つの分析のうち2つの分析でX社会福祉協議会に関するデータを用いており、その点で本研究は事例研究的性格をもつ。X社会福祉協議会のCSWerによる援助を分析対象とした理由は、①筆者に対して「終結なんて考えたこともない」と述べており、不明瞭な終結を扱う本研究の分析対象として適していること、②活動記録の提供やインタビュー調査への協力などが得られたことの2点である。

4. 研究結果の概要

1) 従来の終結概念の構造

まず第1章では、終結に関する先行研究や言説を分析して、従来の終結概念、すなわち明瞭な終結の構造を整理した。第1章では【Q1】「終結概念はどのように説明されてきたのか？」という問いを設定した。

従来の終結概念は個人的関係とは別の、終結可能な関係である専門職的關係を設定することによって「関係を解消すること」としての終結を成立させていた。既存資料に示された終結の記述は、専門職的關係にもとづく援助のなかに「管理内—管理外」という援助過程の軸と「改善あり—改善なし」の援助対象の軸の2つの軸を設定することによって【管理内で改善ありの終結】、【管理内で改善なしの終結】、【管理外で改善なしの終結】、【管理外で改善ありの終結】の4つのタイプに分類できる。さらに終結は専門職的關係のなかで生じているようにみえるが、専門職的關係の外部にある状況制約の影響を受けている。

したがって、従来の明瞭な終結概念は、専門職的關係という援助関係にもとづき、状況制約の影響を受けながら、援助過程と援助対象の軸による4つのタイプのいずれかのかたちをとる構造であるといえる【A1】。

2) 終結の確立経緯

第2章では、19世紀後半から20世紀前半までのソーシャルワークの専門職化の動向を中心に、従来の明瞭な終結概念がソーシャルワークの専門職化のなかで必要とされてきた経緯を記述した。第2章では【Q2】「ソーシャルワークにおける終結はどのような経緯で確立したのか？」という問いを設定した。

友人・隣人関係が重視された1870年代頃からの慈善・社会改良の時期において、終結は活動になじまない概念であった。しかし、Abraham Flexnerの講演の影響を受けて本格化した1910年代頃からの専門職化の過程のなかで、ソーシャルワークは専門性の範囲を限定していく方策をとった。従来理想とされていた友人・隣人関係は否定され、

専門職的關係を前提とした理論が構築された。こうして終結は専門性の範囲の境界線として重要な意味をもつようになった【A2】。これらは1930年代頃に確立する機能派のケースワーク理論に顕著に表れている。

1960年代頃からは国家が莫大な財政負担を背景に、効果的・効率的な資源配分をソーシャルワークにも求めた。その結果として短期処遇やケースマネジメントの方法がソーシャルワークに位置づいていった。このような効果的・効率的な資源配分の要求により、終結は資源供給の境界線としてさらにその重要性が強化されていった。

1970年代頃からは逆に終結を不明瞭にする動きもみられた。ソーシャルワークの統合化により方法、実践分野、目的別の専門性の範囲が解体され、1つのソーシャルワークの専門性に再編された。これにより、終結を明瞭にしていた専門性の範囲は不明瞭になっていった。しかしその一方で、ジェネラリスト実践／アプローチの理論体系において終結は標準的展開過程の1つの局面として位置づけられた。こうして、ソーシャルワークの統合化は終結を不明瞭にする専門性と、終結を標準的展開過程の1つとして位置づける理論体系を形成するという奇妙な事態をもたらした。

日本のCSWは、北米のジェネラリスト実践／アプローチと英国のバークレイ報告を起点とする理論が交差するなかで展開されている。さらに、社会的孤立の問題への対応のため、関係形成や関係継続を重視する援助理念も重視されている。こうした背景があり、ソーシャルワークの歴史において明瞭な終結として確立したはずの終結が、現在の日本では不明瞭な終結となっている。

3) 援助対象と援助過程の継続性

第3章は「終結なんて考えたこともない」というX社会福祉協議会のCSWerが作成した活動記録データをもとに、CSWerの援助における援助対象と援助過程の継続性を考察した。第3章では「援助過程は継続しているか？」【Q3-1】、「援助対象は継続しているか？」【Q3-2】という2つの問いを設定した。

活動記録における援助空白（援助過程がない日）

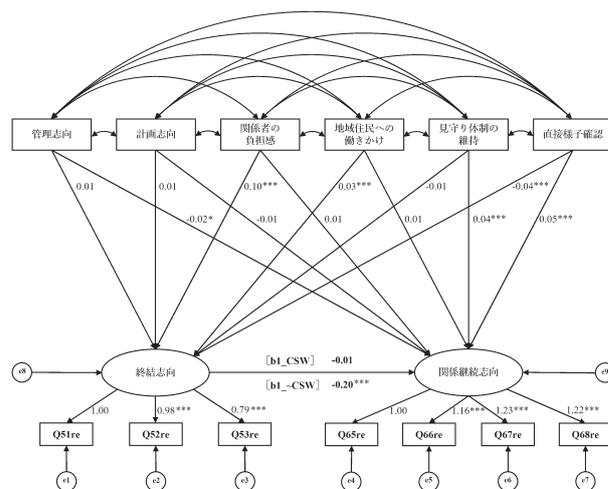
を集計した結果、361日以上 of 援助空白を有するケースが観測された。援助空白の度数分布から、361日以上 of 援助空白を有するケースは極端な援助空白を有するケースであると判断した。ただし、361日以上という援助空白の基準は「継続している可能性が低いと考えたほうが妥当である」という消極的な基準であり、継続しているか終結しているかを判断する基準（境界線）ではない。とはいえ、「終結なんて考えたこともない」援助のデータにおいて極端な援助空白が観測されたことから、「終結なんて考えたこともない」援助であっても援助過程が継続していないと考えた方が妥当なケースが存在し、援助過程の終結はありうるということが出来る【A3-1】。

次に極端な援助空白を有するケースを対象に、その援助空白の前後における活動記録のテキスト記述に統計的な差があるかを検証した。活動記録の計量テキスト分析の結果、極端な援助空白の前後において活動記録のテキスト記述に統計的に有意な差があることが明らかになった。援助対象については①前の援助対象が悪化して再出現するパターンと、②当事者の関係を広げるような高次の援助対象が新たに出現するパターンの2つのパターンがあることが明らかになった。

この結果は、極端な援助空白の前後で援助対象が異なっている可能性を示唆している。つまり援助対象がいったん解消されて、援助空白の後に援助対象が再出現しているということである。こうした活動記録の計量テキスト分析の結果から、「終結なんて考えたこともない」援助であっても援助対象が継続していないと考えた方が妥当なケースが存在し、援助対象の終結はありうるということが出来る【A3-2】。

4) 終結の意識と関係継続の意識

第4章では、全国の都道府県・区市町村社会福祉協議会職員を対象とした質問紙調査データをもとに、CSWerの援助における援助関係の特徴を考察した。第4章では「CSWerは終結を意識しているのか？」【Q4-1】、「終結や関係継続の意識に影響を与える要因は何か？」【Q4-2】、「関係継続に関するCSWerの特色はあるか？」【Q4-3】という3つの問



いを設定した。

質問紙調査データにおける終結の意識の差の検定により、CSWerはCSWer以外と比べて統計的に有意に終結を意識していることが明らかになった【A4-1】。

次に、終結と関係継続の意識に影響を与える要因と、「終結の意識が高ければ関係継続の意識は低くなる」という仮説モデルを設定し、CSWer (N=231) とCSWer以外 (N=400) で異なるかを検証する共分散構造分析による多母集団同時分析を行った。設定した仮説モデルは、GFI=0.946、AGFI=0.904、CFI=0.963、RMSEA=0.047であり、あてはまりのよいモデルであると判断した。その結果《終結志向》すなわち終結の意識に有意な関連があった外生変数は〈関係者の負担感 (+)〉、〈地域住民への働きかけ (+)〉、〈直接様子確認 (-)〉であり、《関係継続志向》すなわち関係継続の意識に有意な関連があった外生変数は〈管理志向 (-)〉、〈見守り体制の維持 (+)〉、〈直接様子確認 (+)〉であった【A4-2】。

また、CSWerの場合、終結の意識の潜在変数《終結志向》と関係継続の意識の潜在変数《関係継続志向》が統計的に関連していない、すなわち2つの意識は統計的に独立していることが明らかになった。一方、CSWer以外の場合には仮説モデルが立証された【A4-3】。

これらの分析結果から、CSWerが終結と関係継続という2つの相反する意識を併存させながら援助

を展開していることが示唆される。

5) 関係継続の成立構造

第5章では、X社会福祉協議会の4名のCSWerを対象としたインタビュー調査データを、質的データ分析法を参考に分析し、CSWerの援助における関係継続の成立構造を考察した。第5章では「どのような構造によって関係継続が生じているのか？」【Q5】という問いを設定した。

調査協力者はCSWerの援助を制度福祉（制度にもとづく福祉サービス）と対置させて説明していた。そして、制度が終結をつくりだしているのであり、制度的な裏づけがない援助を展開しているCSWerには終結がないと考えていた。

調査協力者の語りから、CSWerが構築する援助関係の形態には「個と個の太い関係」、「可変的な複数の細い関係」、「役割と役割の太い関係」、「地域住民からの後方支援関係」の4つのパターンがみられ、「可変的な複数の細い関係」を理想の関係形態としていることが明らかになった。

そして関係継続の構造については、①制度の隙間と関係の隙間の二重の隙間によって他機関の専門職や地域住民につなげることができないために当事者との「関係を切れない」パターン（仕方のない関係継続）、②地域住民に見守りを願っているために義務として地域住民や当事者との「関係を切らない」パターン（義務としての関係継続）、③見守り体制が機能して積極的に情報収集しなくても当事者の情報が入ってくるために「関係が切れていない」というパターン（待機モードの関係継続）、④当事者の状態や状況が改善しないよう

な負担の大きいケースであっても当事者の小さな変化や周囲の地域住民の変化といった成功体験によって「関係が切れなくてもいい」（受容された関係継続）と思うパターンの4つの関係継続のパターンが考察された【A5】。

5. 考察

1) 終結しないケースの存在

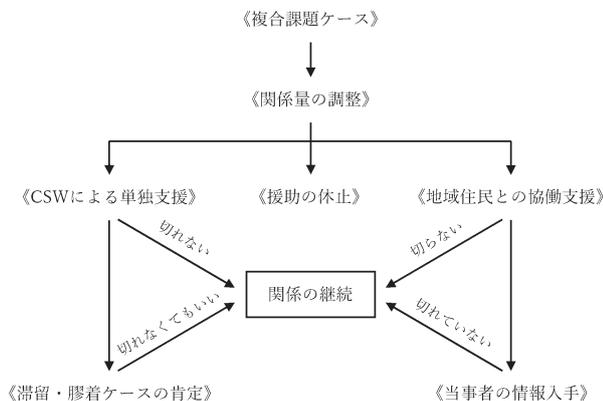
第3章では援助対象と援助過程が終結しうることが明らかになった。しかし、すべてのケースが終結するというわけではない。第5章のデータ分析の結果、長期的に援助が終結しないケース、すなわち援助の3要素が常にそろっている状態のケースがあることが明らかになった。こうしたケースは当事者の人間関係形成が不調であることによって生じる関係の隙間、制度福祉の境界線によって生じる制度の隙間、当事者の状態や状況が改善しないという「関係の隙間×制度の隙間×改善しない」の三重苦のケースであった。三重苦のケースでは援助対象も援助関係も援助過程もすべてそろっている状態が続いており、CSWerが単独で当事者と太い関係を維持しなければならない。

2) 開かれた援助関係

三重苦のケースのような一部のケースを除きCSWerの援助における援助関係は、当事者とCSWerの二者関係ではなく、地域住民や他機関の専門職といった関係者も追加された多者関係の「開かれた援助関係」である。第5章ではCSWerは当事者と自身も含めた複数の関係者どうしがつながる細い関係を理想としていることが明らかになった。さらに、その細い関係は当事者の状態や状況に応じて、適切なタイミングで適切な部分が太い関係になるような可変的な細い関係であることが理想的とされていた。

3) 援助の3要素+α

援助の3要素は援助の必要条件を意味しており、実際の援助は3要素のみで構成されているとは限らない。第5章で明らかになったように、援助関係を継続させていた1つの要因はCSWerと地域住民と



の協働であった。CSWerは地域住民への義務の履行として地域住民や当事者と「関係を切らない」し、地域住民との関係が当事者の存在を想起させるために当事者との「関係が切れていない」という感覚をもつ。こうした地域住民の存在は当事者のへの援助過程において必要に応じて動員される援助資源であるといえる。援助資源を用いた援助における援助関係は、CSWerと当事者の二者関係ではなく、援助資源としての地域住民も加わった多者関係である。こうした援助関係の拡大と、援助資源といった援助の3要素の「+ a」が関係を継続させているために不明瞭な終結が生じる。

4) 場所としての終結

第5章において、調査協力者は他機関を制度の範囲が明確であるという意味を込めて「制度福祉」と呼んでいた。そして制度の範囲が不明瞭な、すなわち不明瞭な終結が生じやすいCSWerの援助と制度福祉を対置させていた。制度の裏づけがないCSWerからみて、制度福祉の援助の終結は制度の境界線に映る。

「制度が終結をつくる」と考えるために、制度の裏づけがないCSWerの援助の終結は不明瞭になる。CSWerの援助においては不明瞭な終結は単に援助の対象者としての該当／非該当、援助の必要／不要を区別する境界線としてではなく、当事者の状態や状況が次のステップへ移行するための行為が生まれる場所として捉えた方がよい。

5) 終結と継続の両立

本研究で着目した不明瞭な終結は「援助の3要素のうち援助対象または援助過程が欠けることによって援助が終結しているにもかかわらず、援助関係が継続しているために援助が終結していないという感覚が生じている状態である」といえる。このような関係継続と両立する終結のことを「曖昧な終結」と名づけることにする。

一般に、終結と継続は対概念である。対概念であるから排中律 (A or ~Aの構造) が適用でき、「終結でも継続でもない」あるいは「終結でも継続でもある」という論理は許容されない。しかし、二値論理にもとづかない容中律 (A and ~Aの構造)

を適用すれば「終結でも継続でもない」あるいは「終結でも継続でもある」曖昧な終結の存在を肯定することができる。曖昧な終結がもつ二値論理にもとづかないという性質は、第4章において終結の意識と関係継続の意識に統計的に有意な関連がみられなかったことにも表れている。

そして第5章のインタビュー調査でみられた制度福祉の存在は二値論理の存在であり、それゆえに制度福祉では範囲の内側か外側かの判断が重視されていたといえる。制度福祉や従来のソーシャルワーク論における明瞭な終結は境界線としての終結であり、それは二値論理の終結であるともいえる。そしてCSWerにとっての終結は境界線ではなく場所としての終結であり、それは二値論理にもとづかない終結である。

6) 従来の終結と曖昧な終結

曖昧な終結の顕著な特徴は、「終結か継続か」という二値論理にもとづかないことである。援助関係を継続させた「終結でも継続でもない」、「終結でも継続でもある」という曖昧な終結は二者関係ではなく多者関係の援助関係を構築した結果であるため、回顧的にしか捉えることができない。そして曖昧な終結は行為でも境界線でもなく、行為が生じる場所である。

7) CSWerによる援助の特徴

終結という観点からCSWerによる援助を整理すると、CSWerは、①制度福祉から範囲外として規定された専門性の範囲において、②当事者と自らを含む援助資源との関係を形成・維持することで、③再開を前提とする終結と関係継続を両立させた断続的な援助を展開しているといえる。

文献

稲沢公一 (2017) 『援助関係論入門—「人と人との」関係性』 有斐閣.